

# *The Book of Margery Kempe* におけるワードペアと *both A and B*

青 木 繁 博

## Word Pairs and *both A and B* in *The Book of Margery Kempe*

Shigehiro Aoki

### 1. はじめに

これまで筆者はandで結び付けられた2語の意味関係などを研究してきたが、ここでは視点を変えて、どのような語句によって2語が接続されているかに着目して考察を進める。andのみによって接続されている表現と、そこにさらにbothが付加されたものとは何が異なるのか、中英語散文テキストに実際に見られる様態を基に論じたいと考える。

#### 1.1. 本論文における背景・着眼点

andなどの接続詞によって結び付けられた表現はワードペアと呼ばれ、英語の歴史を通じて広く見られるものである。筆者はワードペアを [ A and B ] の型 (プロトタイプ) を持つものと位置付けており、青木 (2015、2017、2020) などで、多様な文脈に見られる実際の表現例を対象として研究を続けてきた。ワードペアを [ A and B ] の型 (プロトタイプ) とする観点からは、bothが付加された表現は、そこから発展して、もう一つ要素が加わったヴァリエーションであると捉えられる。

ここで問題となるのは、bothが付加されたことによって、andのみの“通常の”ワードペアからは何が変わったのかといった点である。本来、日常言語におけるA and Bでは、andで接続されることを通じて、既にどちらかではなくAとBの両方を含んでいるはずである。bothがなくても十分に伝わることも多いのではないだろうか。このように、理屈で言えばbothが“不要な”場面においても、あえてbothが使われているとすれば、そこには何らかの表現上の理由などがあるのではないか。元の表現にはない何かを示そうとする意図などがあつたのではないだろうか。

bothを付加することは、漠然とは、AとBのいずれか、両方、あるいはその関係性などを「強調するもの」であろうとは予想されるが、実際に調査されたことはあまりないように思われる。bothが付加されたワードペアと付加されていないワードペアの具体的な様態を、ワードペアが特に多いとされているテキストで精査することによって、bothの表すもの (作者の意図、文中での役割、読者への効果など) が明確に見て取れるのではないかと考えた。

## 1.2. 本論文におけるリサーチ・クエスチョン

本論文において考察する点は以下の通りである。

- 1) bothのあるなし両方が見られるワードペア表現において、そこにはどのような使用域等の差異が見出されるか。
- 2) bothが付加されたワードペアが特に好んで使われる状況、文脈、意味内容はあるか。
- 3) bothが付加されなくてもほとんど同じ意味だったであろう状況等で、bothを付加した作者の意図は何か。

## 1.3. 調査・分析の対象

本論文では*The Book of Margery Kempe*の電子テキスト版に見られるboth A and B等の表現を研究対象とする。なお単語bothそのものは当該テキストにおいては101例が見られるが、そのうち25例は、代名詞としての用法など、andと共に使われないものである。それらは、ここで目指しているワードペアとの比較が成立しない。それらを除外して、both A and BまたはA and B bothの形で使用されていた76例が今回の調査・分析の対象となる。

## 2. 調査結果と考察

*The Book of Margery Kempe*における76例52種類のboth A and B等は以下の通りである。下の表1では、bothがどのような2つの語句を結び付けていたかに沿って用例を分類した。この表では、列は左から、bothで結び付けられた語句、使われていた位置（電子テキストのため頁数はなく、通しの行数）、テキストで実際に見られた形となっている。なお同じ種類の表現が複数回使われていた場合は用例数も付記している。

表1 *The Book of Margery Kempe*における76例のboth A and B等の一覧

結び付けられた語句	位置	実際に見られた形
[a]forenoon, afternoon 5例	622	bothe afornoon and aftyrnoon
	665	bothe afornoon and aftyrnoon
	3903-4	bothe for non and aftyr non
	4920	bothe for none and aftyr none
	4959	bothe for none and aftyr none
anchorites, recluses	577	bothen ankrys and reclusys
archbishops, bishops	50-51	bothe archebysshoppys and bysshoppys
bodily, ghostly 4例	2038-39	bothe gostly comfortys and bodily comfortys
	2598	bothyn bodily and gostly
	3783	bothe gostly and bodily
	II, 788	bothin bodily and gostly

結び付けられた語句	位置	実際に見られた形
body, soul	953	bothe in body and in sowle
bows, arrows	1780-81	bothyn bowys and arwys
church, chamber	2050	bothe in chirche and in hir chawmbre
cry, roar	1638	bothe cry and rore
day light, candle light	109-10	be day lyth and be candel lygth bothe
day, night 8 例	153	bothe nygth and day
	164-65	bothe day and nygth
	704	bothe nygth and day
	2057	bothe day and nygth
	2538-39	bothe days and nyghtys
	4222	bothe nyth and day
	4726	bothyn nyght and day
	II, 410-11	bothe day and nyght
devil, world	4896	bothe the devyl and the worlde
eat flesh, drink wine	1403	bothyn etyn flesch and drynkyn wyn
faint, feeble	867	I am bothe feynt and feble
God, man 2 例	2016	bothe God and man
	4436-37	bothin God and man in oo persone
going, sitting	2051	bothyn goyng and syttyng
good, evil 2 例	3912	bothe good and ylle
	4359	bothe good and ylle
heathen, Christian	3427-28	bothyn hethyn and Cristen
he, his wife, her[their] child	II, 96	bothyn he, hys wife, and her childe
herself, other men and women	3404	bothyn of hirselle and of other men and women
her, thee	4483	comfortyn hir and the bothyn
in the pulpit, beside	3974	bothyn in the pulpit and besyden
living, dying	1245	bothe of levyng and of deyng
loud, still	4310-11	bothyn lowde and stille

結び付けられた語句	位置	実際に見られた形
meat, drink 4 例	475-76	bothen fro mete and drynke
	2479	bothyn mete and drynke
	2533	bothe to mete and to drynke
	II, 576-77	bothyn in mete and drynke
meat, supper	1516	bothin at mete and at soper
meat, wine	1996-97	mete and wyn bothyn
me, he[him]	2577-78	wyth me and he bothyn
men, women 4 例	1627	bothe men and women
	2209-10	bothyn of men and of women
	II, 510-11	bothyn of men and of women
	II, 596-97	bothin of men and of women
monks, priests, secular men	621-22	bothyn of the monkys and prestys and of secular men
mother, brother, sister	715	(he is) bothyn modyr, brothyr, and syster unto me
one, other	1022-23	bothe of on and of other
punish, chastise	266	bothyn punschyn and chastysyn hemself
quick, dead 2 例	768	bothe of qwyk and of ded
	893	bothen of qwyk and of ded
regular, secular	3969	bothyn regular and secular
religious men, other	2322	bothyn of religyows men and other
religious, secular 2 例	989	bothe religiows men and other of secular abyte
	3586	bothyn religyows and secularys
Rome, England	2046	at Rome and in Inglond bothe
sin, labour, etc.	4010	bothe hir synnes, hyr labowrys, hir vexacyons, hir contemplacyons, and also...
sleeping, waking	1170	bothin slepyng and wakyng
smite, beat	4211-12	bothe smytyn and bityn
speak, hear	627-28	bothe speke of hym and heryn of hym
swayers, yeomen	820	bothe swyers and yemen
thee, himself	1781	bothyn the and hemself
this world, the other	3745	bothyn in this worlde and in the other

結び付けられた語句	位置	実際に見られた形
thy will, my will	4276	thi wil and my wil bothe
thysel, all tho that...	1750	bothyn to thiself and to alle tho that thu wylt gevyn it to
weep, cry	4098	bothyn wepyn and cryin
well, woe	2033	bothe in wel and in wo
wife, child	69	bothe a wyf and a chyld
within forth, without forth	3709	bothe wythinne forth in thi sowle and wythowte forth
young, old	5061	bothe yong and elde
your son's death, your death	4150-51	bothe at yowr sonys dethe and at yowr deth

ここからは、bothが付加された表現が、bothのないワードペア表現とはどのように異なっていたかについて、その背景なども含めて論じていく。

## 2. 1. 反意語や対になる語句の割合が高いことについて

当該テキストに限らず、ワードペア全般は同意語からなるものが多いと言われている。しかしbothが付加された表現に関しては、必ずしもそうではないことが今回の調査を通じてわかった。

Koskenniemi (1975) によると、*The Book of Margery Kempe* には、262種類、391例のワードペアがあるとされている (p.213)。262種類のワードペアについては、その意味関係は以下のような構成になっているとのことである。下の表2は、全体としてはKoskenniemi (1975, p.213) を引用したもので、そこに筆者が訳語を充てるなどして整形した。ここに示すように、Koskenniemi (1975) の分類によると、大部分 (約61%) のワードペアが、ほぼ同じ意味の語句からなる組み合わせであったとされている。

表2 Koskenniemi (1975) による、ワードペア表現の意味関係の割合

1. Synonymous or nealy-synonymous 同意語または意味が近い語句	159 (61%)
2. Metonymic (associated by contiguity of meaning) よく同じ場面で使われるなど、意味が隣接する語句	77 (29%)
3. Complementary or antonymous 対になる語句や反意語	26 (10%)

対して表3は、bothが付加された表現の52種類について、今回の調査を通じて見られた意味関係をまとめたものである。ここで主流となっているのは、同意語などではなく、反意語またはもともと対になっている語句が組み合わせられているものであった。

表3 bothで組み合わされた語句の意味関係の割合

1. 同意語または意味が近い語句の組み合わせ	7 (13%)
2. 意味が隣接する語句の組み合わせ	16 (31%)
3. 対になる語句や反意語の組み合わせ	29 (56%)

この違いはどこから生じたものであろうか。まず、Koskenniemi (1975) と筆者とでは、何をもってワードペアと見なすのか等の基準が異なっている可能性があり、その段階から異同があることは否定できない。次に、そもそも同意語かどうかについての判断は、意味の多少の幅がある中で見解が分かれることもあり、曖昧なケースも多いであろう。それらを差し引いてもなお、表2のように明らかに同意語からなるものが圧倒的に多い状況だとは言えず、ワードペア全般と、bothが付加された表現との間には、組み合わせられる語句の意味関係に大きな違いが見られるとすることができる。ワードペア全般とは異なり、bothが付加された表現では、反意語または対になる言葉が組み合わせられる傾向が強く示されている。

bothのあるなしによってこの差異が観察されたとするならば、このことは単語bothの用法自体に起因すると考えるのが自然であろう。これまであまり強調されたことはないかもしれないが、bothには、特に反意語や対になる語句を結び付ける機能があるといった可能性は、今後に向けて指摘されるべきだと考えられる。

## 2.2. 慣用句等との親和性が高いことについて

Wilsonによると、*The Book of Margery Kempe* の文体は、ワードペアの繰り返しが多く、退屈なものとして評価されているようである。確かに同時代の作品と比べると、場面にもよるが、当該テキストについては、やや表現の幅が狭い印象はある。しかしヴァリエーションという観点、ここでは特にワードペアにbothを付加することに着目したとき、Margeryは単純に慣用的なワードペアを繰り返したのではないという面が見えてくると考えられる。

特に複数の用例がテキスト中に見られるものに注目すると、day and night、good and evil、quick and deadといった、現代でもあちこちで見られるようなペア表現に対して、何度もbothを付加して繰り返していることがわかる。加えて、同時代の別のテキストでも見られる、いわば時代を代表するようなペアや、テキスト中の別の箇所でも見られるペアなど、どちらかと言えば頻度が高いペアに対してbothが付加されている印象である。

以上の点から、Margeryは、慣用的なワードペアや頻度の高いワードペアをそのままの形で使うのではなく、bothを付加することで目先を変えるようにしていたとは言えないだろうか。彼女にとっては大切な、ワードペアという数少ない手持ちの技法をより活用しようとしていたとすれば、ここにはMargeryの表現上の工夫が現れており、bothにはワードペアの表現の幅を広げ、ひいては作者の表現の幅を広げる機能があったと捉えられるのではないだろうか。

### 2.3. 人を表す語句等にbothが多く使われていることについて

最後に、人を表す多様な語句に対してbothが多く使われていることについて、当該テキストの内容を踏まえて論じたいと思う。人を表す語句がbothによって結び付けられた表現は、当該テキストの主題にも深く関わっていると考えられる。

当該テキストは、Margeryが神秘的な体験を通じて得た信仰心と、それに基づいて聖地などを旅した経験を記述したものである。エルサレム、ローマなどの巡礼地やイギリス国内外のいくつかの都市で、また教会や街中で、Margeryが多くの人と交流し、彼女によくしてくれた人だけでなく、つらくあたる人や宗教的に反対する人なども含めて多様な人と出会ったことは、この作品におけるハイライトであり、その記述は重要なものであったであろう。それに呼応して、人称代名詞同士を結び付けたものや、men and women、archbishops and bishops、monks and priests and secular menなど、様々な場面で人を表す多くの種類の語句がbothと共に使われている。このようなbothの使用は、*The Book of Margery Kempe* における表現の特色の一つと言えるではないか。

また、前に見たように「同意語でない語句」をむしろ多く接続するbothは、異質なものを結び付けるような言説においても活用されている。religious and secular、heathen and Christianなどの語句のほか、God and man、devil and world、this world and the otherといった語句を組み合わせたbothの表現は、時に人と人との関係を超えて、人ならざるものと人とを結び付けている。これらについては、平信徒ながらキリストのヴィジョンを得たとされるMargeryの、聖と俗とをつないだ経緯そのものと関連していると指摘できるのではないだろうか。

## 3. むすび

ワードペア全般との比較を通じて、*The Book of Margery Kempe* におけるbothが付加された表現には、おそらく作者自身は意識していない使用傾向と、逆に意図的な表現上の工夫を感じさせる面、さらには作品の主題に関わる特徴的な用例などが見られた。今後は、他の接続詞や接続表現 (either A or B, neither A nor Bなど)とも併せて、総合的に接続表現の機能の違いに関する研究を進めたいと考えている。

### 電子テキスト

TEAMS Middle English Texts. University of Rochester. <http://d.lib.rochester.edu/teams>

The Book of Margery Kempe. Lynn Staley, ed.

<http://d.lib.rochester.edu/teams/publication/staley-the-book-of-margery-kempe>

### 参考・参考文献

- 青木繁博 (2015) 「特定の文学ジャンルにおける中英語ワードペアのヴァリエーション」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』第45号、45-55.
- 一. (2017) 「Rhyming Slangとワードペア」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』第47号、85-96.
- 一. (2020) 「通時的に見るワードペアの語順の交替」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』第50号、71-79.
- 一. (2022) 「同意語からなるワードペアの繰り返しに関する一考察」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』第52号、169-175.

- Cooper, William E., and John Robert Ross (1975) "World Order." *Papers from the Parasession on Functionalism*. Eds. Robin E. Grossman, L. James San, Timothy J. Vance. Chicago Linguistic Society, 63-111.
- Katami, Akio (2009) "Word Pairs in Middle English Mystic Prose of the Fourteenth Century." 『埼玉学園大学紀要』経営学部篇 9, 177-189.
- Kikuchi, Kiyooki (1995) "Aspects of Repetitive Word Pairs." *POETICA* (Tokyo: Shubun International Co., Ltd.) 42, 1-17.
- Koskenniemi, Inna (1968) *Repetitive Word Pairs in Old and Early Middle English Prose*. Turku: Turun Yliopisto.
- (1975) "On the use of repetitive word pairs and related Patterns in *The Book of Margery Kempe*." *Style and Text: Studies Presented to Nils Erik Enkvist*. Ed. Hakan Ringbom. Stockholm: Sprakforlaget Skriptor AB, 212-218.
- (1983) "Semantic Assimilation in Middle English Binomials." *Studies in Classical and Modern Philology: Presented to Y. M. Biese on the Occasion of his Eightieth Birthday, 4. 1. 1983*. Eds. Iiro Kajanto, et al. Helsinki: Suomalainen Tiedeakatemia, 77-84.
- Leisi, Ernst (1947) *Die tautologischen Wortpaare in Caxton's "Eneydos"*. New York: Hafner.
- Malkiel, Yakov (1959) "Studies in Irreversible Binomials." *Lingua* 8, 113-160.
- Meech, Sanford Brown and Hope Emily Allen, eds. (1940) *The Book of Margery Kempe*. EETS O.S. 212. London: Oxford University Press.
- Miwa, Nobuharu and Su Dan Li (2003) "On the Repetitive Word-Pairs in English—With Special Reference to W. Caxton—." 『鹿児島大学法文学部紀要 人文科学論集』58, 49-66.
- Mollin, Sandra. (2012) "Revisiting Binomial Order in English: Ordering Constraints and Reversibility." *English Language and Linguistics* 16.01, 81-103.
- (2014) *The (Ir) reversibility of English Binomials: Corpus, Constraints, Developments*. Studies in Corpus Linguistics 64. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Shibata, Shozo (1958) "Notes on the Vocabulary of *The Book of Margery Kempe*." *Studies in English Grammar and Linguistics: A Miscellany in Honour of Takanobu Otsuka*. Eds. Kazuo Araki, et al. Tokyo: Kenkyusha, 209-220.
- Shimogasa, Tokuji (1997) "Binomial Expressions in *Le Morte Arthur*." *Bulletin of the Faculty of International Studies, Yamaguchi Prefectural University* 3, 59-74.
- Stone, Robert Karl (1970) *Middle English Prose Style: Margery Kempe and Julian of Norwich*. The Hague: Mouton.
- Wilson, R. M. (1959) "Three Middle English Mystics." *Essays and Studies*. New Series 9, 87-112.
- Yamaguchi, Hideo (1971) "A Study of the *Book of Margery Kempe*." 『神戸女学院大学論集』第18巻 第1号, 1-44.
- 谷明信 (2003) 「初期中英語 the 'Wooring Group' のWord Pairsの用法とその特徴」『兵庫教育大学研究紀要』第23巻 第2分冊、19-24.
- (2008) 「Chaucer の散文作品におけるワードペア使用」『ことばの響き—英語フィロロジーと言語学—』今井光規・西村秀夫(編). 東京: 開文社、89-116.
- 渡辺秀樹 (1994) 「同意語並列構文の系譜」『英語青年』140. 6 (1994年9月号)、285-287.